

イザヤ書 53章、マタイによる福音書 2章 1-2節
『誰を拝んで生きるのか』

アドヴェントの第3主日を迎えました。今朝はイザヤ書 53章を読んで、一緒に神さまを礼拝したいと思います。

イザヤ書というのは、とても長い年数にわたって預言されたものを編纂した書物で、200年にも及ぶ期間にわたっています。しかもその間にはバビロン捕囚という、イスラエルの国が滅び、多くの民が捕虜としてバビロニアに強制連行され、外国で奴隷としての生活を余儀なくされる、という過酷な歳月が含まれています。イザヤ書 53章は捕虜生活の続く中で預言されたもので、神さまの救いはわたしたちにどう与えられるのか、ということを実に求めていった預言者たちが聞いたものが、語られているのです。ここには、救い主とはどのような方なのか、という預言者が求め続ける中でたどり着いた救い主の姿が語られています。

しかし、おそらくはこの53章が預言されたときも、その後も、聞いた者、読んだ者は、ずいぶんとそぐわないもの、違和感を感じたのではないかと、思います。どうしてかといえば、救い主というのは、力あるもの、権威あるもの、人を引きつけるもの、有力で困難に立ち向かう方、というイメージがわたしたちにはあるからです。例えば、先週わたしたちが聞いた洗礼者ヨハネには、そういうものが多分に備わっていたのではないかと想像します。例えば、イスラエルの国王であったダヴィデ。彼は美しい人で、力もあり、信仰に生きる人で、政治的な手腕も、行政能力も高く、人々からの人望も厚く、たんなる王以上の何かを期待された人でした。

そうした人たちに代表されるようなイメージ。それが救い主の一般的なイメージなのではないでしょうか。

53章に記されているのは、見るべき面影はなく、輝かしい風格も、好ましい容姿もない。軽蔑され、見捨てられ、痛みの人、病の人だ、というのです。

神がわたしたちのために与え給う救い主は、人々に軽蔑され、見捨てられる人だ、というのです。その一言で、もう引いてしまう人もいるはずですが、わたしたちは軽蔑される人、見捨てられるような人に、救い主のイメージを重ねていない。ましてその人は、痛みの人、病の人だという。打たれて、苦しんでいる、という言葉も出てきて、満身創痍の様子が伝わってくる。

53章の冒頭にあるように誰がこんなことを信じられようか、ということなのです。救い主が傷ついたものとして、痛みを抱え、苦しむものとしているということそれ自体がわからない。軽蔑されて、見捨てられるそういう存在として、救い主である、ということはそもそもわからな

い。

なぜ、神はこのような救い主をわたしたちに与えようとされたのか。

以前、ある本を読んでいた時、一人の方が水俣病と自分とのかかわりについて書いている文章に出会いました。水俣病というのは、熊本で今から60年以上も前に起きた日本で初の公害病で、ある会社が流した水銀を含む工場排水で引き起こされた慢性の神経系疾患です。多くの人が苦しみ、今も苦しんでいる公害病です。その方は水俣病の患者ではなく、ずっと遠くから見つめていた人です。水俣病を支援する会の会員となり、水俣病で苦しむ人たちを遠くから見つめていた、というのです。その人は自分は水俣病で苦しむ人たちから力づけを受けた、というのです。直接交流があったのかどうかもわかりません。自分の個人的な経験の中で、水俣病患者の方から力づけを受けた、ということを書いておられるのです。どういう個人的な経験なのかは、わかりません。しかしなんらかの苦しみの経験をその人も抱えてきた。その中で、水俣病患者のひとたちから力づけを受けた、生きる勇気をもらった、と書いているのです。

自分が本当に苦しんでいるとき、苦しんだとき、苦しんで生きている人から力づけを受けた、生きる勇気をもらった、それは力のある人から、助けを受けたとか、いろいろなことができる人から救いの手を差し伸べてもらった、というのとは違います。痛んでいる、苦しんでいる、傷ついている、という相手の存在全体が自分に力づけを勇気を与えてくれた、という経験です。

どうして人は、そういう力づけとか勇気を受けることができるのか。

それは、力ある人、強い人から力を受けるよりも、痛んでいる人、苦しんでいる人、築いている人から受ける力づけの方が全身的だからだ、とその人は書いていました。

肉親を亡くして悲しんでいる人がいて、その人に対して、力ある人、強い人が励ます、ということと、自分も同じように肉親を亡くして深い悲しみの中にある人が手を握る、ということを見ると、その方が言う全身的、ということが多少とも伝わってきます。

イザヤ書53章が預言するわたしたちの救い主は、わたしたちの立っている場所の上の方から、わたしを救い上げてくださる、というではありません。痛んでいる、苦しんでいる人たいして、こういう考え方をすれば、苦しみから逃れられるよ、とアドヴァイスや専門的な意見を言ってくれる、ということでもない。さらに言えば、苦しんでいる人の場所に降りて行って、寄り添う、ということとも全く違う。軽蔑されて、見捨てられる、そういう人の場所に近づいて行って、愛の手を差し伸べる、ということとも全く違う。

この方は、自分自身の存在そのものが痛んでいく、苦しんでいく、軽

蔑まれていく、見捨てられていく、とっているのです。上からとか、下から、その人の立場に立とうとするとか、降りていく、ということではない。自分存在そのものが苦しんでいく、打ち砕かれていく、軽蔑されていく、見捨てられていく、裁きを受けていく、いのちを取られていくのです。死んでいくのです。

水俣病で苦しんでいる人から力づけられた、と語ったその人は、全身的だ、という言葉を使いました。そこに打ち震える何かがあったのでしょう。苦しんでいる人がその苦しみの中で生きている、存在そのものが苦しみながら生きている、それが今苦しんでいる人の存在に力を与えていく。それは頭の中だけのことではない、全身的なのです。

苦しんでいる存在から力づけられる、それはいつでも、というわけではないし、ときに、人は苦しんでいる人のまえを平気で通り過ぎていくこともあるでしょう。自分が本当に苦しんでいない時には、苦しんでいる人を見て、お気の毒とか、たいへんですね、ということで終わってしまうのかもしれない。

イザヤ書53章の預言する救い主は、にもかかわらず黙々と苦しみを受けていった。お気の毒どころか、あいつは神からの罰を受けているのだ、とまで言われても彼は口を開かない。だがそれはわたしたちの受けるべき苦しみだった、と預言者は言うのです。わたしの悪のために打ち砕かれていた、というのです。

アドヴェントにイザヤ書53章を読む、それはとても大事なことです。クリスマスに降誕された神の独り子は、どのような救い主だったのか、それを受けとめていくことがアドヴェントをすごしていく、ということだからです。

クリスマスが美しいもので満ちていて、クリスマスを美しいもので飾り付けていこうとするのは、それだけ人間の闇が深いからだ、といった人がいます。深い闇がないかのように明るく、美しく飾り立てる。しかし、人間はどんな人も暗闇を抱えているのです。軽蔑されても仕方のない悪をわたしたちは内に抱えています。見棄てられたとしても仕方のない悪をうちに秘めています。人として生きる中で、自分の身にも傷を負ったでしょうし、誰かに傷を負わせてきたのです。苦しむ人のまえも、悲しむ人のまえも、見て見ぬふりをして通り過ぎていったことも少くないのです。あのレビ人や祭司のように。

だが、イザヤが預言する救い主は、わたしを糾弾するのでもなければ、わたしの欠点をあげつらうのでもない。ただ自分自身が痛むもの、傷つくもの、苦しむもの打たれるものとなっていく。懲らしめを受ける者となっていく。わたしたちに寄り添って、ではない。救い主が自分自身わたしの受けるものを受ける。黙々と受ける。

彼は自らを償いの献げものとした、そして人々がそれによって贖われ

るを知って満足する、というのです。それだけでない、「彼が自らをなげうち、死んで、罪人の一人に数えられたからだ。多くの人の過ちを担い、背いた者のために執り成しをしたのは、この人だった。」

なんという救い主なのか。やがてイエス・キリストがこの世に来られ、救い主の歩みをなされたとき、イザヤ書53章の預言はこの方を指し、この人において成就した、ということに人々は気づかされた。アドヴェントの時は、このキリストの到来を全身的に感じる時です。眼を開いて、救い主の到来を、自分の暗闇の中で、感謝のうちに受けとめさせていただき、この方を礼拝していきたいと思うのです。